



Title	特集1：国際ワークショップ「東アジアから原爆文学を読みなおす」（全文）
Author(s)	
Citation	グローバル日本研究クラスター報告書. 2018, 1, p. 9-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68042
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【特集1】

国際ワークショップ

東アジアから原爆文学を読みなおす

本特集について

宇野田 尚哉

本特集は、2017年9月29日に韓国大邱の嶺南大学校で開催された国際ワークショップ「東アジアから原爆文学を読みなおす」の記録である。主催は嶺南大学校人文学事業団東アジア平和学チームで、原爆文学研究会と大阪大学大学院文学研究科グローバル日本研究クラスターが協賛するかたちをとった。その構成は次の通りである。

趣旨説明

崔範洵 (嶺南大学校)

セッション1 原爆文学研究の現状と課題—東アジアから問いなおす—

報告1 原爆文学研究の現状と課題—東アジアという視座から— 川口隆行 (広島大学)

報告2 原爆文学と朝鮮人被爆者・在韓被爆者—御庄博実の詩業を中心に—

宇野田尚哉 (大阪大学)

ディスカッサント発言

台湾から

李文茹 (淡江大学)

韓国から

曹銘根 (嶺南大学校)

リプライ・討論

セッション2 韓国の原爆文学をどう読むか

報告3 記憶の政治学と国境を消す苦しみの連帯

金文柱 (嶺南大学校)

ディスカッサント発言

日本から

村上陽子 (沖縄国際大学)

韓国から

権赫泰 (聖公会大学校)

リプライ・討論

総合討論

このうち、本特集には、趣旨説明・各報告・各ディスカッサントの発言の原稿を収めた。多岐にわたって活発に展開された討論の記録を収めることができなかったのは残念である

が、その一端は、2017年11月18日付『西日本新聞』文化欄掲載記事「『唯一の被爆国』とは異なる立場から／海外にも広がる〈原爆〉を読む試み」(内門博記者)や、『原爆文学研究会報』第53号(2017年12月、同研究会のホームページで閲覧可能)などで、すでに紹介されている。

本特集の末尾には、この国際ワークショップの企画の中心となった三人による「国際ワークショップを終えて」を収めてある。開催に至るまでの経緯、成果と課題、あわせて企画された陝川の原爆資料館へのスタディ・ツアーなどについては、この文章を参照されたい。意義の大きい今回のワークショップの総括としては不十分な文章ではあるが、次の展開を構想するためのとりあえずのメモとご理解いただけたら幸いである。

趣旨説明

崔 範 洵

原爆の問題は、日本、それも広島・長崎に限定された問題として、認識される傾向があります。さらに、日本の植民地支配を受けていた韓国・台湾、そして日本と戦争状態にあった中国では、原爆は、「解放」を早めてくれたもの、もしくは対日戦争を早期に終結させてくれたものと受け止められています。このような状況を踏まえると、原爆文学と東アジアを結びつけることにはなんの有効性もないように感じられるかもしれません。しかしながら、広島・長崎における原爆被害者の約1割が朝鮮人であったという事実や、原爆被害者には植民地台湾や中国大陸をはじめとするさまざまな地域の出身者が含まれていたという事実に接すると、原爆問題の領域は広島・長崎あるいは日本だけにとどまらなくなるでしょう。原爆は広く東アジアとも関わる問題なのです。上記の事実は、日本社会に原爆問題についての認識の再考を迫るとともに、東アジアという観点に立つことの必要性を提起しています。「原爆問題と東アジア」という枠組を設定すると、そこから多くの有意義な問いが生まれてくるのです。

たとえば、原爆問題を東アジアとつないで考えると、「なぜ広島・長崎に多くの朝鮮人がいたのか」という問いが生じてきます。この問いは、広島・長崎の原爆問題を反省的に再考しようとするとき、さらには1945年8月の敗戦以前に日本が東アジアと結んでいた関係のあり方を反省的に再検討しようとするとき、有意義な観点を提示してくれます。日本社会は原爆を「三たび繰り返されてはならない悲惨な出来事」と受け止めてきていますが、上述の問いからさらに踏み込んで、「そもそもなぜ広島・長崎に原爆が投下されたのか」という問いまでを包括していくと、そこからは、原爆問題を東アジアの観点から考察することの意義や、原爆問題を媒介としてナショナリズムを克服する可能性が、見えてくると思います。

原爆問題を東アジアとつないで考えることは、ワークショップの表題にある「原爆文学」を再検討するとき、とくに有効です。「原爆文学と東アジア」という枠組からは、「日本の原爆文学は朝鮮人被爆者をどのように表象してきたか」といった問いを導きだすことができますし、そこから日本の原爆文学研究や原爆文学史を再点検する契機も生まれてきます。一方、「原爆文学と東アジア」という枠組は、日本とちがって韓国や台湾には原爆文学といえるものがほとんど存在しないという状況をも浮き彫りにします。このような非対称性は、

原爆文学を東アジアの観点から再検討することの有効性に疑問符を付すことになるといえなくもないかもしれませんが、しかし、より積極的に考えるなら、このような非対称性にこそ重要な意味があるともいえます。韓国や台湾の場合、原爆被害者の存在が広く知られるようになったのはやっと最近になってからのことですが、そのような状況に着目して韓国社会や台湾社会を考察することも可能でしょう。さらに、東アジアのなかでも北朝鮮の原爆被害者や原爆文学についてはほとんどなにも知られていないことを考えると、この作業は東アジア内部の非均質性や断絶を省察する契機にもなりうると思います。

今回のワークショップでは、以上のような問題意識に基づいて、「東アジアから原爆文学を読みなおす」という主題を掲げたうえで、この主題を二つのセッションに分けて考えることにいたしました。まず、セッション1では、日本の原爆文学研究の現状と課題を東アジアの観点から再検討する報告、また日本の原爆文学のなかの朝鮮人被爆者と在韓被爆者の表象を考察する報告を聞いてから、韓国と台湾の研究者がそれぞれコメントするかたちをとります。このセッションは、これまでの原爆文学研究の成果を踏まえううえで、日本の原爆文学を東アジアの観点から読みなおす試みであるといえるでしょう。

つづくセッション2では、作品の数は少ないもののたしかに存在している韓国の原爆文学についての報告を聞いたうえで、日本と韓国の研究者がコメントするかたちをとります。日本の原爆文学と韓国の原爆文学の違いなどを手がかりとして議論を広げていくことができるのではないかと考えています。セッション2の日本側のコメントでは、沖縄からの観点も導入されて、より多様な見方が提示されることと思います。そして、最後の総合討論では、二つのセッションの報告とコメントを踏まえながら、意見交換を行いたいと思います。

すくなくとも韓国では、「東アジアから原爆文学を読みなおす」という主題を掲げたワークショップは、はじめてであろうと思います。はじめての試みなので、不十分な部分も出てくると思いますが、各セッションの報告・コメントと討論、そして総合討論が、原爆文学研究の外延を拡大してくれるとともに、ナショナリズムを止揚して東アジアにおける新たな連帯を模索する動きへとつながっていくことを期待しています。

原爆文学研究の現状と課題

—東アジアという視座から—

川口 隆行

はじめに

ここ大邱^{テグ}は、韓国初の原爆資料館がある陝川^{ハプチョン}から近いだけではなく、北朝鮮のミサイルを迎撃するという THAAD ミサイルの基地がある星州^{ソンジュ}からも遠くありません。最近、日本のテレビや新聞、週刊誌では、北朝鮮の核開発、ミサイル発射の文字を見ない日はありません。北朝鮮からミサイルが発射されるやいなや、J アラートなる全国緊急警報が各自自治体の防災無線を通して流されます。屋内退避を呼びかけ、電車の運行も停止するなど、いまにも北朝鮮のミサイルが落ちこちてくるといわんばかりです。私などは、日本上空 800 キロを通過し、2000 キロ離れた太平洋上めがけて発射されたミサイルよりも、世界各地で事故を繰り返しているアメリカ軍のオスプレイがいつ落ちてこないかと心配していますが、多く人はそうしたことには関心がなさそうです。また、先日インドを訪問した日本の首相は、その折、北朝鮮の核開発を厳しく非難しましたが、締結済みの「日印原子力協定」を強力に推進するとも明言しました。中国と対抗するためにインドと仲良くしたいのですが、インドが核兵器保有国であり、核兵器開発を推進する立場を捨てていない以上、矛盾した態度というほかありません。北朝鮮の核開発は問題ないというつもりはありませんが、冷静さを欠きながら北朝鮮の核の「脅威」を語ることで何か重大なことを見過ごしはしないか、そのほうが気になります。「脅威」を誰がどのように語るのか、それはどのような社会的働きをするのか。日本において北朝鮮の核の「脅威」は、朝鮮半島の危機として語られることはありません。つねに日本の危機として語られます。それは日本政府にとって政権を維持するために好都合に働くでしょうし、政府の主張を無批判に垂れ流すマスメディアも共犯者です。

私に与えられた役割は、ワークショップのテーマである「東アジア」という視座から「原爆文学研究の現状と課題」を報告することですので、これ以上、時事ネタを喋るのは慎みますが、こうした現在進行中の問題は、私の報告や今回のワークショップと関係ないことはありません。これはすでによくいわれていることですが、1945年8月6日の広島、9日の長崎の原爆体験とその記憶は、いわゆる「戦後」日本においてナショナル・アイデンティティを保証する集合的記憶として機能しました。「原爆文学」と呼ばれる文学ジャンルも

例外ではありません。一般に、日本で「原爆文学」といいますと、広島、長崎の出来事を描いた日本文学の特種なジャンルと見なされてきました。しかしそうした見方は、広島・長崎に限定された体験を描いた狭い範囲の「当事者」の文学として「原爆文学」を押し込めたばかりか、そこでいわれる原爆の悲惨さとは、多くの場合、「日本人」が経験した悲惨さとして理解されました。それは裏を返せば、「原爆文学」はもとより、原爆体験を学んだり、論じたりすることは、日本人以外の人々にとっては、あまり関心がない、意味が見いだせないことであったかもしれません。あるいは、「戦後」日本のナショナルな物語を拒絶するあまり（それも場合によっては理解できるのですが）、逆に別の排他的なナショナル・アイデンティティを立ち上げてきた場合もあるでしょう。

1. 原爆文学研究の歴史

日本における原爆や核に関する研究を便宜的に整理しますと、三つに大別できます。(1) 被災者救済援護運動と結びつき展開した経験社会学的研究、(2) 原爆投下から現在の核問題、あるいは原発の導入から福島原発事故にいたる歴史的経緯を調査解明してきた国際政治学的研究、(3) 言説分析や表象分析に主眼をおいた文学や文化の研究です。(3)の核に関する文学や文化の研究には、映画や美術、ポピュラー・カルチャーなどさまざまな文化的表象も含まれますが、歴史的にいえばまずそれは「原爆文学」の研究から始まりました。

連合国軍による日本占領、東アジア冷戦の激化、そして朝鮮戦争が勃発する1940年代後半から50年代前半にかけて、広島や長崎の原爆の惨禍に遭遇した原民喜や大田洋子、栗原貞子、峠三吉、あるいは永井隆といった体験者が小説や詩、エッセイを書きはじめます。その後、1954年、アメリカの水爆実験でマグロ漁船が被害を蒙った「ビキニ事件」（第五福竜丸事件）をきっかけに、日本では原水爆禁止運動が国民的な盛り上がりを見せます。この時期にさきほど述べた小説家や詩人の作品を議論の対象とした小田切秀雄『原子力と文学』（講談社、1955年）が刊行されます。

60年代後半から70年代になると、子供時代に原爆を体験した林京子や中沢啓治が作品を書きはじめ、大江健三郎や井伏鱒二といった文壇の若手、重鎮であった非体験者による作品も多く登場するようになります。研究や批評においてとりわけ重要な仕事を残したのは、長岡弘芳という在野の文学史家・文献史家です。彼はベトナム戦争反対運動に参加しつつ、原爆文献の収集や原爆文学史の執筆といった活動に精力的に取り組みます。長岡は既存の文学史や雑誌特集、各種文学辞典に「原爆文学」という言葉がほとんど出てこないことを問題にし、『原爆文学史』（未来社、1973年）、『原爆民衆史』（未来社、1976年）、『原爆文献を読む』（三一書房、1982年）など、精力的に調査・研究を推し進め、広島や長崎の原爆体験に由来する膨大な作品群を、一つのジャンルとして眺め、批評する視座を提供します。

80年代前半には、アメリカのレーガン大統領が唱えた限定核戦争論やNATO（北大西洋条

約機構)への核配備によってヨーロッパ、アメリカなどで新たな反核運動が起きますが、日本も同様でした。長岡はこの時期、『日本の原爆文学』全15巻(ほるぶ社、1983年)の実質的な編集責任者として刊行に尽力します。これは現在にいたるまで「原爆文学」と銘打った唯一の全集であり、「原爆文学」の体系化と普及に大きく寄与します。それは、黒古一夫やアメリカの日本文学研究者ジョン・W・トリートによる作品研究へとつながります。

2. 原爆文学研究の現状と課題

一方、言語論的転回を経た80年代の文化思想や批評理論は、新たな研究動向を生み出しました。文化人類学の立場から核のカタストロフの語られ方を論じた、米山リサ『広島 記憶のポリティクス』(岩波書店、2005年。原著1999年)はその代表でしょう。米山は、冷戦期の「大きな物語(マスターナラティブ)」に依拠することで、次第に指示内容を狭めて陳腐な記号となった「ヒロシマ」に、多元的な意味を求める多様な動きとそれを封じこめようとする力のせめぎあいを読み込みます。また、小沢節子『「原爆の図」 描かれた〈記憶〉、語られた〈絵画〉』(岩波書店、2002年)は、知名度の割には反戦平和のプロパガンダとのみ理解され、美術史において正当な位置づけがなされなかった丸木位里・俊「原爆の図」をとりあげ、その生成のプロセスを探るとともに、絵画としての表現の可能性とその社会的な働きを解明しようとしていました。

彼女たちの研究は、狭義の文学研究とは別に出自があるのですが、文学研究もこうした動向と無縁ではありませんでした。2001年に当時九州大学教員であった花田俊典の呼びかけで原爆文学研究会が発足、翌年には機関誌『原爆文学研究』が創刊されます。今回このワークショップに日本から参加しているメンバーの多くが関わりを持つ研究会です(台湾から参加している李文茹さんもその一員です)。もちろん同じ研究会のメンバーといっても興味・関心はそれぞれ違うので、ひとまとめにいうことはできませんが、あえて大枠としていえば、長岡らの学恩に畏敬の念を払いつつ、彼らがジャンル化した「原爆文学」という枠組自体を再検討しながら、さまざまな作品や事象を論じてきたといえるでしょう。

核・原爆の表象は、すべての表象がそうであるように、生産や受容の様態を含む社会的文化的関係性(=表象システム)の中で表出されます。国民国家は、社会的文化的関係性(=表象システム)を通して国民意識を喚起します。「原爆文学」もその例外ではありません。そういう点からいえば、「原爆文学」という文学ジャンルは、典型的な原爆物語の生成と受容、批評的な言説実践の軌跡そのものといえるでしょう。もうすこし簡単にいえば、「原爆文学」とは、ナショナルな原爆物語を強化することもあれば、それを批判的に捉えかえずものでもあるわけです。私個人は、2008年に『原爆文学という問題領域』(創言社)という本を発表しました。議論の対象を小説、詩、評論はもとよりマンガ、慰霊碑碑文、証言集にまで広げながら、「原爆文学」を実体的、固定的に捉えるのではなく、錯綜した声のせめ

ぎ合いが継続される記憶と生存の場と位置づけました。また、山本昭宏『核エネルギー言説の戦後史 1945 - 1960』(人文書院, 2012年), 中尾麻伊香『核の誘惑—戦前日本の科学文化と「原子力ユートピア」の出現—』(勁草書房, 2015年)といった狭義の文学に収まらない、多様な核の文化表象を論じた新しい世代の研究も登場しています。

今回のワークショップのテーマである「東アジア」という点からいえば、第2部のディスカッサントでもある村上陽子さんの『出来事の残響—原爆文学と沖縄文学—』(インパクト出版会, 2015年)が重要になります。村上さんは、「原爆文学」と「沖縄文学」という異なる文脈から生み出された二つの文学ジャンルを論じていますが、単純な共通性を見出したり、同一の枠組に回収しようとしたりはしません。それぞれの文学ジャンルが関わってきた集合的記憶から零れ落ちる出来事の記憶を、それぞれの領域の作品から丹念に拾い上げようとしています。

今回のワークショップのために村上さんの本を再読しながら考えたことをいえば、たとえば「原爆文学」と「在日朝鮮人文学」、「原爆文学」と「朝鮮戦争文学」、あるいは「原爆文学」と「4・3事件文学」といった議論を立てることは意味があるのかなのかということがあります。そもそも「朝鮮戦争文学」とか「4・3事件文学」とかがジャンルとして成立しているのかどうかさえ不勉強で知らないのですが、おそらく韓国には韓国のナショナル・アイデンティティ、集合的記憶と関わる文学があるでしょう。文学史や文学作品、批評や研究は個別のさまざまな体験を集合的記憶として方向づけもしますが、そのことで何が忘却されたのか。あるいは、そうした集合的記憶にどのように介入したのか(しえなかったのか)。異なる言語や地域で書かれ、まずは読まれた異なる文学(ジャンル)を同じ枠組に性急に回収するのではなく、たがいをつきあわせながら読みなおすことで、それぞれが抱える固有の問題と共通する課題が見えるかもしれません。もちろんこれは日本と韓国に関わることだけではなく、さまざまな国や地域の文学や社会の問題へと展開することが出来るでしょう。そうした議論を積み重ねることで、「東アジア」のさまざまな「戦後」、冷戦期からポスト冷戦期の経験を捉え返すことが可能になるのではないのでしょうか。

繰り返しになりますが、「原爆文学」というジャンルが生成し、受容され、批評される社会文化的関係性(=表象システム)を問うことは、「戦後」日本で語られた広島、長崎の記憶、国民的な原爆物語を問題化することだとして、アメリカにはアメリカの原爆物語があるし、中国には中国の原爆物語があります。国や地域によっては、原爆を語らないという物語もあるでしょう。「戦後」日本の国民意識と深く関わった日本語で書かれた「原爆文学」を論じるためにも、日本国内あるいは日本語で書かれたテキストに議論を限定することなく、さまざまな言語や地域で生み出された核の表象や言説にも目配りする必要があるでしょう。先日、ここ数年の共同研究の成果として、『〈原爆〉を読む文化事典』(青弓社, 2017年)という編著を刊行しました。やはり今回日本から参加しているメンバーの多くに協力してもらった仕事です。日本語で書かれた「原爆文学」に直接かかわることだけではなく、たとえ

ば「アメリカの大衆文化と「核の神話」」、「台湾民主化と反核」、「先住民権利運動」、そして「朝鮮半島と核危機」といった項目も意識的に設定しました。「朝鮮半島と核危機」を担当したのは本日もここに参加されている高榮蘭さんです。現在進行中でもあるこの問題をまとめるのは大変なことだと思われませんが、すばらしい整理をしていただきました。高さんは、「北朝鮮での文学言語には、原爆への恐怖が潜在化」しており、それは「ヒロシマ・ナガサキではなく、朝鮮戦争のときの記憶、すなわちアメリカによる激しい空爆と核の脅威にさらされた」ことによると述べています。また、アメリカの「核の傘」のもとにある韓国では、核という言葉は、「日本帝国を「無条件降伏」させ、「朝鮮半島」から日帝（日本帝国主義）を追い出した武器」であるとともに「アメリカ占領軍の否定的な権力の表象」といった具合に、分裂的に使用されているとも述べています。さらに重要なのは、「南と北が核危機の起源として朝鮮戦争を位置づけることによって、ヒロシマ・ナガサキで被爆した朝鮮人の問題が後景に追いやられてしまう」とも述べています。高さんの指摘は、「原爆文学」と「朝鮮戦争文学」をつきあわせてみたらどうかというさきほどの提案とも通じる点があるかもしれません。

3. 東アジアから栗原貞子「ヒロシマというとき」を読みなおす

最後に少しだけ、「東アジアから原爆文学を読みなおす」というテーマを掲げたワークショップですので、具体的な作品の一つ紹介したいと思います。栗原貞子「ヒロシマというとき」（1972年）という詩です。

〈ヒロシマ〉というとき／〈ああ ヒロシマ〉と／やさしくこたえてくれるだろうか
／〈ヒロシマ〉といえば〈パール・ハーバー〉／〈ヒロシマ〉といえば〈南京虐殺〉
／〈ヒロシマ〉といえば 女や子供を／壕のなかにとじこめ／ガソリンをかけて焼いた
マニラの火刑／〈ヒロシマ〉といえば／血と炎のこだまが 返って来るのだ

〈ヒロシマ〉といえば／〈ああ ヒロシマ〉とやさしくは／返ってこない／アジアの
国々の死者たちや無告の民が／いっせいに犯されたものの怒りを／噴き出すのだ／
〈ヒロシマ〉といえば／〈ああ ヒロシマ〉と／やさしくかえってくるためには／捨
てた筈の武器を ほんとうに／捨てねばならない／異国の基地を撤去せねばなら
ない／その日までヒロシマは／残酷と不信のにがい都市だ／私たちは潜在する放射能
に／灼かれるバリアだ

〈ヒロシマ〉といえば／〈ああ ヒロシマ〉と／やさしいこたえがかえって来るた
めには／わたしたちは／わたしたちの汚れた手を／きよめねばならない

この詩は、アメリカ人や日本人以外のアジアの人々にとって、「ヒロシマ」という言葉が普遍的な暴力の象徴ではなく、日本の加害性を想起させるものであることを問題にしています。栗原貞子という詩人は、先にも触れましたが広島で被爆し、戦後すぐにその体験を詩にしています。60年代後半から70年代前半にかけては、長岡弘芳同様にベトナム反戦運動に参加、その活動を通して日本のアジアに対する加害者性を認識したといわれています。「ヒロシマというとき」はそれを詩にした彼女の代表作の一つです。

私もこの詩を高く評価するものですが、同時にさまざまな問いを発しているようにも思います。「ヒロシマというとき」については先に紹介した私の単著でも論じていますので、そこで触れなかった「〈ああ ヒロシマ〉と／やさしくかえってくるためには／捨てた筈の武器を ほんとうに／捨てねばならない／異国の基地を撤去せねばならない」というフレーズについて思うことを簡単にお話しします。このフレーズは、日本国憲法第9条で戦争放棄を明記しながら、広大な米軍基地と米国の「核の傘」に守られた「戦後」日本の平和主義の矛盾を指摘しています。また、現在にいたるまで圧倒的な米軍基地を押しつけられている沖縄の状況を問題にしているとも読めそうです。ベトナム戦争時、沖縄は米軍の重要な戦略拠点でした。この詩が書かれたのは沖縄が日本に「復帰」した72年です。

一方、この詩には「異国の基地」はありますが、「自国の基地」すなわち自衛隊の存在は語られていません。不戦の誓いを徹底しようとするならば、それと自衛隊の存在との整合性を問うことは避けて通れないはずです。また、沖縄の日本「復帰」は、日本のマジョリティにとって、日本と沖縄の歴史的不均衡を是正するというよりも、アメリカに奪われた領土を回復するというナショナルな欲望に力点がありました。この点において、「ヒロシマというとき」という詩は、沖縄の置かれた状況を問題にしようとしながらも、実のところ日本のマジョリティの欲望と微妙な共犯関係にあるという解釈も成り立ちそうです。あるいは、そうした日本人のナショナルな欲望からこの詩を解放するためにも、米軍基地の経験が沖縄（≒日本）の問題としてだけでなく、韓国やフィリピンなどの経験へとより積極的につなげる想像力も必要かもしれません。

実をいえば、こうした読みが最初に浮かんだのは、私が2000年代に7年ほど働いていた台湾の大学の授業を通してでした。この詩を学生たちと読んでいた時、ある男子学生が「米軍基地はいらないけど、自国を守る軍隊は必要だ」といった発言をしたのです。韓国同様、徴兵制が存在する台湾では、軍隊に入るということは、良くも悪くも彼らにとって切実な問題です。台湾の学生からヒントを得た私の読みが、正しいのか間違っているのかはわかりませんが、「東アジアから原爆文学を読む」ということは、こうしたさまざまな立場からの解釈を重ねながら、自動化された読みを問い直し、ナショナルな物語としての「原爆文学」を、多くの人々の共有財産にしていくことではないでしょうか。今回のワークショップもそうした試みの第一歩となればと考えています。ご清聴ありがとうございました。

原爆文学と朝鮮人被爆者・在韓被爆者

—御庄博実の詩業を中心に—

宇野田 尚哉

はじめに

川口さんが「東アジアという視座」から「原爆文学研究の現状と課題」についてお話しになりましたので、それを踏まえて私からは「原爆文学と朝鮮人被爆者・在韓被爆者」というテーマでお話しさせていただきます。具体的には、詩人御庄博実さんの詩業を中心に据えつつ、医師丸屋博さんの活動にも触れながら、お話しさせていただくことになるのですが、あらかじめご説明しておきますと、御庄博実さんと丸屋博さんというのは、医師で詩人の、一人の人物です。「丸屋博」が本名で医師としてのお名前、「御庄博実」がペンネームで詩人としてのお名前です。以下、敬称は省略してお話しさせていただきます。

本報告では、被爆体験をめぐる認識枠組は日韓でどう違うかを確認したあと（第1節）、それぞれの認識枠組を揺るがす存在として朝鮮人被爆者がいることを指摘します（第2節）。そして、原爆文学とコリアンの被爆者との関係について見たうえで（第3節）、丸屋博／御庄博実と在韓被爆者李順基との交流を手がかりとしながら、「原爆文学と朝鮮人被爆者・在韓被爆者」について考えてみたいと思います（第4節・第5節）。

1. 被爆体験をめぐる認識枠組は日韓でどう違うか？

まずは、被爆体験めぐる認識枠組は日韓でどう違うか、という問題について考えてみたいと思います。

敗戦後、日本は、原爆を投下した戦勝国アメリカに7年間も占領されていました。また、日本は、独立を回復すると同時にアメリカと軍事同盟を結んでアメリカの核の傘のもとに入りました。冷戦構造のもと、日本は西側陣営にしっかりと組み込まれていたといえます。

その結果、日本では、反核運動は、原爆を投下したアメリカの責任を追及する方向には向かいませんでした。もちろん被爆者の間にはアメリカに対する怒りや憎しみがあつたわけですが、日本の置かれた国際的立場が、それを表立てることを難しくしたといえます。その結果、日本では、被爆体験は、人類にとって三たび繰り返されてはならない体験として、その意味で人類にとって普遍的な意味を持つ体験として、語られてきました。

それに対して、韓国においては、原爆は、韓国を日本による植民地支配から解放したものの1つと捉えられているのではないかと、その限りで、人類の存在を脅かす絶対悪とは捉えられていないのではないかと思います。その観点からすると、広島・長崎の被爆体験も、韓国を植民地支配した日本人が支払うべき応分の代償であったと捉えられることになるのかもしれない。

被爆体験をめぐる日韓の認識枠組にはこのような対立関係があるということを、まずは押さえておく必要があるように思います。

2. 私たちの認識枠組を揺るがす朝鮮人被爆者

このような2つの認識枠組の対立関係を揺るがす存在が、朝鮮人の被爆者です。この問題に関わる最も重要な書物は、市場淳子『ヒロシマを持ちかえった人々』（凱風社、2000年、新装増補版 2005年。韓国語版は、이치마 준코 지음 / 이제수 옮김『한국의 히로시마 : 20세기 백년의 분노, 한국인원폭피해자들은 누구인가』, 역사비평사, 2003年)ですが、同書は、朝鮮人被爆者は広島市で約5万人、長崎市で約2万人、そのうち被爆死者は広島市で約3万人、長崎市で約1万人で、「全被爆者の約1割が朝鮮人であった」と指摘しています。私は、この事実自体が韓国側の認識枠組を揺るがす力を持っているのではないかと考えますが、いかがでしょうか。

ところで、『ヒロシマを持ちかえった人々』は、次のような、きわめて重要な指摘も行っています。日本人被爆者の被爆体験の語りは原爆が炸裂した瞬間から始まるのに対して、朝鮮人被爆者の被爆体験の語りはなぜ自分は広島あるいは長崎に居合わせたのかを語るところから始まる、というのです。この指摘は、朝鮮人被爆者にとっては、植民地支配下での困窮や、植民地支配下での徴用が、広島あるいは長崎での被爆と、ひと連なりのものとしてあったことを示しています。朝鮮人被爆者の被爆体験を貫く植民地主義。この点は、人類にとって普遍的な意味を持つ体験としてのみ被爆体験を語りがちな、日本側の認識枠組を揺るがす力を持っています。

じつは、日本においては、この点は、運動においても、表現においても、1960年代後半以来、自覚化されてきています。そのような自覚化を促したのは、より広い文脈に即して言えば、日韓条約反対運動、ベトナム反戦運動、入管闘争などの高揚であり、より個別的な文脈に即して言えば、密航という手段で日本社会に立ち現れ被爆者として治療を受ける権利を主張した在韓被爆者孫振斗の存在と彼を支援する日本側の運動の高揚でした。川口さんが紹介された栗原貞子の「ヒロシマというとき」は、日本の加害性の自覚なしに被爆体験を語ってもアジアの人々には届かないという、この時期に生まれてくる認識を象徴する作品の1つでもあります。(ただし、この作品には朝鮮人被爆者は登場しません。川口さんが提起しておられるようなこの作品の読み直しをさらに推し進めようとする際には、この点は重要なポイ

ントになるのではないかと思います)。

このように、日本の運動／表現においては、日本の加害性の自覚なしに被爆体験を語ってもアジアの人々には届かないという認識は、すでに長い歴史を持っているわけですが、それが主流化されているわけではもちろんありません。主流を占めているのは、「唯一の被爆国」という日本を特権化する語り、被爆体験を語る権利を日本が独占してしまいたいという欲望です。この国際ワークショップ「東アジアから原爆文学を読みなおす」の、日本側における最も重要な課題は、そこを突破して、韓国の、ひいては東アジアの読者と共有可能な認識枠組を構築することにある、といえるだろうと思います。

3. 原爆文学とコリアンの被爆者

解放後、コリアンの被爆者は、冷戦の構造的負荷のもと、さまざまなかたちで分断され、沈黙させられてきました。分断されてきたというのは、単純に在日・在韓・在朝に分断されてきたというだけでなく、たとえば在日コリアンの被爆者が韓国支持か共和国支持かの政治的立場性によって分断されるといったこともありました。コリアンの被爆者が、被爆者であるという一点においてさまざまな分断線を越えて結集し声をあげることはきわめて難しかったのであり、日本社会の側の差別意識とも相俟って、コリアンの被爆者は見えにくい存在におしとどめられ続けてきたといえます。

コリアンの被爆者は、被爆地の日常のなかでは身近な存在だったはずなのですが、原爆文学の作品にコリアンの被爆者が登場することは、後述する御庄博実の詩作品のような例外的事例を別とすれば、まれであるように思います。原爆文学においても、コリアンの被爆者は、見えにくい存在におしとどめられ続けてきたわけです。また、コリアンの被爆者自身が狭義の文学作品を書くということも、ほとんどなかったのではないのでしょうか。植民地支配下での貧困や徴用の結果広島・長崎への移動を余儀なくされそこで原爆に行き合わせたコリアンの被爆者の場合、狭義の文学作品を書きうるほどの教育を受ける機会に恵まれた人はほとんどいなかったといった事情もあったでしょうし、韓国の場合、かりに自分の被爆体験に基づく作品を発表したとしても肯定的に評価される可能性はほとんどないばかりかかえって差別を誘発する可能性のほうが高かった、というような事情もあったかもしれません。いずれにせよ、原爆文学においては、登場人物の面でも、書き手の面でも、コリアンの被爆者は不在なのです。私は、このような不在自体が、議論されるべき問題であると思います。

原爆文学とコリアンの被爆者との関係を問う問い方としては、いま述べたようにその不在の意味を問うという問い方が一つあるわけですが、もう一つの問い方としては、既存の文学の概念自体を転換してしまうという問い方もあります。1960年代後半以来の取り組みのなかで、コリアンの被爆者からの聞き書き、コリアンの被爆者による手記はたくさん蓄

積されていますから、既存の文学の概念にはおさまりにくいそれらをも包括する方向で私たちの「原爆文学」という概念を組み立てなおす、という問い方です。研究対象の不在を嘆くのではなく、「原爆文学」研究の側からコリアンの被爆者に寄り添っていくようなアプローチをとることが必要なのではないか、とりわけ韓国の研究者にそのようなアプローチをとってもらえるとよいのではないかと、私はそのように感じます。

なお、最近刊行された川口さん編集の『〈原爆〉を読む文化事典』（青弓社、2017年）には、「朝鮮人被爆者を／が語る」という項目が立てられていて、黒川伊織さんが執筆しておられます。本報告とも深く関わる内容の項目ですので、ぜひあわせてご参照いただければと思います。

4. 在韓被爆者李順基の自分史と丸屋博

以下、残された時間では、これまで述べてきたことに関わる具体的事例について、少し立ち入ってお話ししておこうと思います。

さきほど、すでにたくさん蓄積されているコリアンの被爆者からの聞き書きやコリアンの被爆者による手記をも包括する方向で私たちの「原爆文学」という概念を組み立てなおす必要があるのではないかと、という提起をいたしました。そういう方向に踏み出そうとするとすぐに問われることになるのは、そのような聞き書きや手記はどのようなテキストと捉えればよいか、という問いです。程度の差はあれ、通訳者や翻訳者、聞き書きの書き手や編集作業の担い手の関与抜きに、聞き書きや手記について考えることはできないからです。ここには難しい問題が山積していますが、この点について考える手がかりをも与えてくれる稀有なテキストとして、在韓被爆者李順基さんの自分史があります（李順基「陝川で芽生えた広島のだんごり」、被爆者の自分史編集委員会編『生きる—被爆者の自分史—』第3集〔同委員会発行、2002年〕初出、丸屋博・石川逸子編『引き裂かれながら私たちは書いた—在韓被爆者の手記—』〔西田書店、2006年〕再録）。本節ではしばし、この李順基さん（以下、敬称略）の自分史について考えてみることにしましょう。

李順基は、1930年12月に、陝川出身の父とその父が広島で出会った朝鮮人の母とのあいだに広島で生まれ、そして育ちました。満14歳のとき、勤労働員中に被爆しますが、辛くも生き延びて、解放後、家族とともに陝川に移ります。「どん底の生活」を送るなか、1950年に朝鮮戦争が勃発すると志願して兵士となり、休戦協定成立後の1954年満期除隊し、陝川に戻り、つつましい生活を送ります。その後健康上の不安が深刻になるなか、妻の勧めで韓国原爆被害者協会陝川支部に入会し、被爆者健康手帳を取得、1996年には広島共立病院に3ヶ月間検査入院します。このとき広島医療生協原爆被害者の会のメンバーと交流したことがきっかけとなって、同病院の名誉院長で同会の会長でもあった被爆者の丸屋博との親交も始まることになりました。

その後、1998年には広島原爆病院で喉頭癌の手術、2000年には広島共立病院で胃癌の手術を受けますが、2001年には広島共立病院で癌の肝臓への転移が判明し、もはや手術もできない病状であると告げられ、絶望した李順基は、そのまま帰国してしまいます。その李順基に、励ましの手紙を送り、闘病の支えとして自分史を書くよう勧めたのが、丸屋博でした。李順基は丸屋の勧めにしたがって自分史を書き始め、病気が進行してもはやペンを持たなくなったのちには、丸屋が陝川を訪れて李順基の口述を録音し文字化するというプロセスを経て、この自分史は完成されます。その様子は、NHKの番組「最期に綴ったヒロシマーある韓国人被爆者の遺言―」（初回放送2002年1月26日、NHK平和アーカイブズで視聴可能、http://www.nhk.or.jp/peace/library/program/20020126_01.html 参照）に記録されています。

聞き書きや手記は、程度の差はあれ、語り手・書き手と聞き手・編集者との共同作業によって成り立つものだといえるでしょうが、李順基の自分史も、自身の驚異的な粘り強さと、丸屋の献身的な支えが相俟って、はじめて完成されたものだといえます。朝鮮戦争期には、一方は朝鮮半島で韓国軍に身を投じ、一方は日本で反米反戦運動に身を投じていたわけですから、50年後に二人の協同でこのようなテキストが完成されるにいたったということには、深い感銘を覚えます。

今回の報告を準備していて気づいたことなのですが、このような二人の協同の基盤にあったのは、医師と患者という関係ではなく、同じ被爆者としての連帯だったのではないかと思います。この点と関わっては、「丸屋博」と「御庄博実」の二面性ではなく、「丸屋博」の二面性、すなわち、「丸屋博」は、広島共立病院院長（のち名誉院長）という医師としての側面と、広島医療生協原爆被害者の会会長という被爆者運動のリーダーとしての側面と、2つの側面を持っていた、という点が、重要であるでしょう。李順基との協同の基盤となっていたのは、「丸屋博」の、後者の側面であったといつてよいと思います。

実際、広島医療生協原爆被害者の会は、2005年発行の第28集で終刊となるまで、『原爆体験記 ピカに灼かれて』という冊子を、30年近くにわたって発行し続け、被爆体験の聞き書きや手記を掲載し続けていたのです。そこには、広島共立病院が渡日治療の受け入れ先となった在韓被爆者からの聞き書きも掲載されており、2001年には同会と韓国原爆被害者協会陝川支部とのあいだで姉妹縁組もなされています。丸屋は、原爆体験記編集の長い実績のうえに立って、おそらくは李順基の日本語能力も見極めたうえで、闘病の支えとして自分史を書いてみるよう勧めたのだただらうと思います。李順基の自分史は、突出した事例ではありますが、孤立した事例ではなく、長い取り組みの歴史と多くの聞き書き・手記をその裾野に持つテキストなのだというのを、ここでは強調しておきたいと思います。

この自分史の細部にここで立ち入ることはできませんので、私にとって最も気になる点についてのみ、ここでは言及しておきたいと思います。この自分史は、「丸屋先生の言う、被爆者としての責任を果たして、命の絶えるまで自分史を書き続けて、日本の人、韓国の

人だけでなく、世界の人に知らせたい。韓国にもこんな被爆者がいる」という意図で書かれているのですが（前掲『引き裂かれながら私たちは書いた』、141頁）、その末尾は、かなりトーン異なる、「今語り終えて、もう何もかも忘れたい、そんな思いです」（同前、142頁）という一節で結ばれています。もう何もかも忘れて楽になりたい、というこの末尾の一節こそが、死に臨んだ李順基の最も率直な真情の吐露であるように私には読めます。そこから翻って考えてみますと、闘病の支えとして自分史を書けという丸屋の励ましは、ほとんど残酷なと形容してもよいような励ましだったのではないかと思えてきます。しかし、二人ともそのことは了解したうえでこの自分史に取り組み、完成させたのだらうとも思いません。このように多くのものの賭けられたテキストとして私たちの前に遺されてあるこのテキストを「原爆文学」としてどう読むか、それが私たちに問われていることなのだらうと思えます。

5. 御庄博実『原郷』の詩的想像力と東アジア

丸屋博は、岩国で生まれ育ち、広島で旧制高校に通い、岡山医大で学んで医師となり、東京勤務ののち、岡山の水島に移って反公害運動に取り組み、1977年の広島共立病院開院と同時に院長として広島に移って、被爆者運動・平和運動に取り組みました。

詩人御庄博実としては、岡山医大在学中から、峠三吉を中心とする広島の詩サークル「われらの詩の会」に参加するとともに、社会派の有力詩誌『列島』（東京）・『山河』（大阪）にも参加していて、1950年代以来の詩作の経歴を持つ社会派の重要な詩人であるということになりますが、医師としての活動や社会運動家としての活動に惜しみなくエネルギーが注がれたためか、詩業の分量はそれほど多くなく、また若い頃と晩年に集中しています。

若い頃の代表作は、基地の街岩国とそこに暮らす自らの家族に視点を据えてアジア・太平洋戦争から朝鮮戦争にいたる現代史を描いた『岩国組曲』（文芸旬報社、1952年）です。暗く重苦しい雰囲気にと終始するこの叙事詩は、岩国基地から朝鮮半島に向けて飛び立つ爆撃機の音の聞こえてくる岩国病院の、結核療養中のベッドで、死を予感しながら書かれました。

晩年の代表作は、ここで取り上げる詩集『原郷』（思潮社、2006年）で、表題詩を含む冒頭の6編は、李順基との関わりのなかで書かれた作品となっています。表題詩「原郷」の全文を引用しておきます。

人の一生は／一枚の地図である／山があり 川があり／道がきれぎれに続く／赤い
インキの染みもある／いつもたどった道には／手指の脂がしみついている／陝川（ハ
プチョン）への道だ

「五十六年目の原爆症」／あの八月六日の劫火が／いま再び燃えあがる／あなたは
いのちを削りながら／ヒロシマの日日からの／「自分史」を書く／焼け焦げた／ぼろ
ぼろのマントにくるまって／歩いてきた道／陝川への傷ついた道は／紙の裏側から
血を流す

あなたの目は／僕を見つめながら／はるか遠くを見ている／濡れている あなたの
視線は／ふるさとの墳墓を射る／泣いているのは山の声／果てしなく／遠祖へさか
のぼっている

五十六年間／深い海の底で／あなたは／貝のように孤独であった

ふるさとに広島を根付かせたい と／平和公園のどんぐりの実を拾い／陝川の庭で
育てる／〈ビニールを外した今年の寒さが厳しくて 生き残ったのはわずかに数本で
あった〉と／遠い細い声で伝えてきた／きみの「原爆症」は／いまだれほどのいのち
を削っているか

あなたの視線は／僕を貫いて／あの閃光を凝視する／地底深く水脈は／黙って原郷
へ帰る

この作品の末尾の一節「あなたの視線は／僕を貫いて／あの閃光を凝視する／地底深く水脈は／黙って原郷へ帰る」は、とりわけ鮮烈な印象を残します。被爆地広島と「韓国のヒロシマ」陝川を詩的想像力においてつなぐ試みがここでなされていることが、なによりも重要な点です。そして、「僕」は、「あの閃光を凝視する」「あなたの視線」に「貫」かれる位置に身を置いていることに、とくに注意したいと思います。「僕」の想像力は「あなた」を媒介として在韓被爆者の「原郷」陝川に広がっていくわけですが、そのなかで「僕」は、「あなたの視線」に「貫」かれ、何者なのか問い直されることになるのです。このような、自己の問い直しをはらむ他者とのつながりをはぐくむ詩的想像力が働いている点が、この作品の優れたところであり、そのような詩的想像力が働いているという点で、かつて栗原貞子が「ヒロシマというとき」で声高に提出した課題への御庄なりの物静かな応答ともなっているように思います。

話を詩集『原郷』に戻しますと、李順基と関わる作品の次に、満州からの引揚者である妻の「故郷」を訪ねる作品が置かれている点は重要で、この詩集において「故郷」をめぐる想像力は東アジアに広がっていきます。続く第2部の作品では御庄の故郷岩国と彼が旧制高校時代を過ごした第二の故郷広島が舞台となりますが、基地に蹂躪される岩国、原爆により破壊された広島というイメージが、織り込まれていきます。他の作品も含めた詩集

全体として『原郷』がどれくらい成功しているかについては議論の余地があると思いますが、20世紀の戦争と暴力、強いられる移動と被爆、といった問題を、東アジアというスケールの詩的想像力のうちにおさめとったこの詩集は、やはり注目に値する作品であると思います。そして、詩人御庄博実にそのような詩的想像力を喚起したのは、丸屋博としての在韓被爆者李順基との関わりでした。李順基の自分史も含めて、このような関わりのなかから生まれてきたテキストの総体を、「原爆文学」として私たちの視野におさめていくことが重要であるように思います。

おわりに

最後に1点だけ補足しておきますと、詩人御庄博実も、朝鮮人被爆者問題と深く関わりその関係の作品を残しもした御庄の友人の歌人深川宗俊も、彼らの雑誌や詩集の表紙絵や挿絵を描き続けた四国五郎も、みな朝鮮戦争期に反米反戦運動に身を投じた仲間たちであったという点には、よく注意しておく必要があるように思います。朝鮮戦争期に峠三吉を中心とするネットワークに加わり3度目の原爆使用を阻止するために立ち上がった人たちが、1970年代以後も、朝鮮人被爆者問題・在韓被爆者問題に持続的に取り組んでいったわけです。これは、戦後日本の精神史の重要な地下水脈ですが、原爆文学の系譜を考えるうえでも重要だと思いますので、一言しておきます。

以上です。ありがとうございました。

【付記】

丸屋博と李順基の交流に取材した作品として、大門高子・文／松永禎郎・絵『やくそくのどんぐり』（新日本出版社、2010年）という絵本が刊行されている。また、御庄博実は、金文柱報告の後半の主題となる高炯烈『リトルボーイ』の日本語版（コールサック社、2006年）に解説を寄せて、「主人公のひとり、金中輝が僕には李順基に重なって見える」（同書 213頁）と記している。

在韓被爆者問題（韓国人原爆被害者問題）の歴史や、日本における在韓被爆者支援運動の歴史は、現在進行形の問題であり運動であるという事情もあって、まだ十分に記述されていないが、辛亨根・川野徳幸「韓国人原爆被害者研究の過程とその課題」（『広島平和科学』第36号、2012年）は優れた概観である。また、本報告を行ったのちに、在日本大韓民国民団広島県地方本部韓国原爆被害者対策特別委員会編集発行『韓国人原爆被害者70年史資料集』（2016年8月5日発行）とイトウソノミ「権利を勝ち取るまで—日本で在韓被爆者を支えた人々—」（広島部洛解放研究所紀要『部洛解放研究』第23号、2017年1月）を入手した。どちらも重要な文献なので、ここに付記しておく。

ディスカッサント発言1：台湾から

李文茹

2017年1月11日、台湾では2025年までの脱原発を明記した電気事業改正法を国会で可決しましたが、核廃棄物の処理をめぐる問題は依然として解決されていないままです。台湾では低レベル放射性廃棄物は現在、先住民タオ族の居住地でもある蘭嶼という島に貯蔵されています。1997年に台湾電力が自社の原子力発電所から発生した低レベル放射性廃棄物を北朝鮮に輸出し処理する合意に達し、蘭嶼にある一部の廃棄物も北朝鮮に輸出される予定でした。しかしその合意は未履行のままであるため、2013年に北朝鮮から1010万米ドルの違約金を請求されたと報道されています。2017年9月22日、国連の加盟国ではない台湾でも行政院（内閣）は北朝鮮の核開発、ミサイル発射に対する国連安全保障理事会の動きに歩調を合わせる意思を示し、北朝鮮に経済制裁を実施することを発表しましたが、核燃料廃棄物輸出の問題は依然として未解決のままとなっています。

さて、本題に戻りますが、「東アジア」の視座から原爆文学研究の現状と課題について考えるのがこのセッションの主な目的です。川口さんと宇野田さんのご報告は、「日本」もしくは「日本人」という共同体をめぐる想像を揺さぶるための方法としての、広義の原爆文学を提起すると同時に、ナショナル・アイデンティティの助長に利用されがちな歴史的事実としての「原爆」の性格についても示唆に富んだ指摘がなされていたと思います。ここでいうナショナル・アイデンティティの問題には、被爆国としての日本だけでなく、旧日本帝国に支配された経験のある韓国や台湾も含まれます。

台湾の場合についていえば、韓国の場合と同様に、原爆のきのこ雲はアジア太平洋戦争の終結を意味し、日本の植民地支配からの解放の象徴的なシンボルとなっています。とくに1987年に戒厳令が解除されるまで台湾の戦後史は与党だった国民党の中国の戦場における日中戦争の記憶と結びついており、「原爆」は帝国や敗者としての「他者」の歴史として語られてきました。きのこ雲の下に起きた出来事を想像する土壌が長い間貧弱なまま、台湾は戦後史を歩んできましたが、近年、それをめぐる記憶を掘り起こす作業が行われはじめました。2011年に「台湾被爆者の会」が設立され、2012年に『台湾の被爆者たち』（平野伸人監修、長崎新聞社）という本が日本で出版されました。それまで台湾籍の被爆者の存在は台湾社会ではあまり知られていませんでした。なぜ語られなかったのか、あるいは語れなかったのか、検討される必要があるでしょう。

「原爆文学研究の歴史」をめぐって、川口さんのご報告のなかでは、原爆文学をめぐる評論の歴史的な流れが説明されていました。台湾現代文学においては原爆より原子力発電所（以下、原発）のほうが早い時期から注目され、それはちょうど台湾の民主化運動の動きと連動していました。第一原発が稼働したのは1978年で、反原発の言説もその時期から少しずつ登場してきますが、本格化するのは80年代の半ば以降です。「報道文学・記録写真」を特色とする文芸雑誌の『人間』（1985年11月～1989年9月）はその代表例です。この雑誌は原発施設の労働者の被曝問題を取り上げるほか、原爆文学「夏の花」も翻訳掲載したりするのですが、その関心の多くは原発被曝者を含めた労働者問題、あるいは環境問題にあり、広島や長崎における台湾人被爆者の経験が語られることはありませんでした。仮説になりますが、この問題は、『人間』という雑誌が反国民党であると同時に、中国大陸との統一を志向する陳映真（1937～2016）という文学者・知識人によって主宰されていたという複雑な事情も関係しているように思われます。簡単に言えば、いま現在の国民党は批判しなくても、過去の国民党や中国共産党がおこなった抗日戦争の語りについてはうまく問題化することができなかつたのかもしれませんが。日本の戦争責任を語ることは大事ですが、そのことが、台湾において日本の植民地支配をどのように内在的に語るのかという問題をおざなりにさせてしまったとも言えそうです。同じ日本の植民地支配を経験した韓国とも微妙に異なった台湾の「戦後」の問題かもしれません。

また、台湾の場合、原発問題と関わっては、先住民族問題、エスニック・マイノリティの問題が重要です。核廃棄物が貯蔵される島の出身のタオ族の作家シャマン・ラポガンの作品、とくわけ「核」の問題を扱う作品（『大海浮夢』、2014年初出、2017年日本語訳）は、台湾内部における漢民族による先住民族に対する支配の問題を暴露します。また、台湾という枠組を超えて、マーシャル諸島などにおける核実験の被害を被った先住民族（海と共に生きる民族）との間のマイノリティ同士の連帯関係の可能性をも提示しています。さらに言えばそこから「東アジア」という枠組を脱構築する力を見出すこともできるでしょう。既存の枠組を強化するのではなく、それを揺さぶる可能性を見出し、境界を超える多様な対話の可能性を作り出していくことにこそ、原爆文学を再読する意味があるし、今度上梓された『〈原爆〉を読む文化事典』はそれを実践したのものであると考えています。

とりあえず私からのコメントは以上です。

ディスカッサント発言2：韓国から

曹 銘 根

私は、文学研究者ではなく韓国近代史の研究者ですので、その観点からコメントしようと思います。私にとって「原爆文学」は、不慣れなテーマです。韓国では関連研究も少ないです。このコメントでは、現在私が抱いている疑問について質問することにします。

①「被爆」の認識において韓国と日本は葛藤関係にあるのか？

報告のなかで、韓国では原爆によって日本が降伏したため原爆を人類普遍の問題として受け入れていないところがあるのではないかと述べられていましたが、その部分は少し誤解もあるように思われます。韓国人が喜んだのは、日本の敗戦による解放の喜びを感じたからであって、日本が原爆によって代価を払ったと考えたためではありません。もしも、そのような認識があるとするれば、それは論理的な飛躍だと考えます。当時、韓国の独立を願っていた韓国人たちは当然日帝の敗北を願いましたし、アメリカの原爆投下はその日帝の敗北を早めた処置の一つと考えています。しかし、日本の悲劇と韓国の解放とが葛藤関係を形成しているような二項対立的な構図で説明できるのだろうか、はたしてそれは両国の中の葛藤なのか、という疑問があるわけです。日本の軍国主義が戦争中に行った数多くの民間人虐殺と蛮行が批判されるように、原爆によって犠牲になった日本人たちも同じく被害者であるという認識も一般的に存在すると考えます。

②韓国人被爆者の認識

韓国人被爆者たちは、基本的に「植民地支配がなかったら被爆することがあったのだろうか。なぜよりによってその時広島や長崎にいたのだろうか」という考えを抱いたであろうと思います。さらに、だれも責任を負わない現実により一層絶望したことでしょう。「とくに日本と韓国の両政府の無関心に怒りを感じたのではないだろうか。はたして韓国人被爆者はだれをより怨むだろうか。植民地支配をした日本だろうか、原爆を投下したアメリカだろうか。あるいは、彼らを冷遇した韓国だろうか」という問いが湧いてきます。もし、被爆者手記などに、そのような問いにかかわる内容があるのであれば、彼らの認識を理解することができると思います。

また、李順基の場合、御庄博実との交流が彼の認識にどのような影響をあたえたのかが

もっと知りたいです。と同時に、御庄博実の作品に、李順基の体験や彼の自分史の告白がどのような影響をあたえたのかについても、もっと具体的な言及があればよかったですと考えます。両者の関係をたんに人間的な交流だけで説明してしまうのは物足りないような気がします。

③原爆文学に映るアメリカはどのような姿なのか

日本の一部の人は、原爆を日本人だけが被害を受けた唯一無二の体験として、その特殊性の観点だけから原爆問題を考えようとする被害者意識が強いように思われます。その結果、帝国主義と第二次世界大戦を引き起こした加害者としての反省を拒否します。と同時に、加害者であるアメリカにその責任を問う動きも活発ではありません。そこで、原爆文学ではアメリカがどのように扱われているのかについて知りたいです。とくに、御庄博実の場合、かれの故郷である岩国にはアメリカ海兵隊の基地が建設されましたし、第二の故郷と言える広島は被爆しました。加害者の軍事基地が故郷に建設されているのを見る御庄博実の心情がどのように表現されているのかが知りたいです。

最後に一言付け加えておきますと、原爆文学が 1945 年 8 月の被爆の問題だけを扱うのであれば、普遍性を獲得できるでしょうか。現在進行形の核戦争の脅威や原子力発電所をめぐる問題まで包括して扱うことが普遍性をより広げていく方法であるように考えます。以上です。ありがとうございました。

記憶の政治学と国境を消す苦しみの連帯

金文柱

1

いま私たちのいる嶺南^{ヨンナム}大学校は、韓国の第5～9代（1963年2月～1979年10月）の大統領であった朴正熙^{パクチョンヒ}が、旧大邱^{テグ}大学と青丘^{チョング}大学を合併して設立した大学です。5.16軍事クーデタ（1961年）で権力をにぎった朴正熙は、1967年7月に大統領に再選されたあと、嶺南大学校を設立（12月）し、大学の「校主」になりました。嶺南大学校の前身である旧大邱大学校は、ノブレス・オブリージュ（Noblesse Oblige）を実践した名門家「慶州・崔氏」をはじめとする（嶺南）地域の儒林たちの寄付と献身による民族大学であり、青丘大学校は勉強に集中できなかつた労働者たちのための夜間大学からはじまった市民大学でした。現在、この二つの大学の20年の歴史は、嶺南大学校の沿革に何の解説もなく、ただ一行記されているだけです。嶺南大学校は、自分の前身であった二つの大学を出来る限り排除しようとしているのです。

記憶は、アイデンティティの核心です。「私」という存在は記憶の産物であって、多様な経験による多くの記憶とそれに基づいた思惟によって、はじめて「私」は私になります。何を自分の過去から記憶するかは、自己・アイデンティティを構成する最も重要な作業です。過去の無い現在はありませんし、整理されなかつた過去はゾンビのように帰還して存在を揺さぶるでしょう。これは個別の存在だけでなく、共同体にも適用されます。記憶をめぐる格闘は、記憶が終結された過去ではなく、現在に属するものであることを意味し、記憶そのものよりもそれをどのように処理するかが重要な問題であることを示唆します。この点で、保存・貯蔵すること（記）と想起すること（憶）で構成された「記憶」という言葉は、本質的に名詞ではなく動詞であります。

嶺南大学校では、時々戦闘機の騒音のため一息話を止めないといけない時があります。ソウルでは経験できないことが、人口250万の居住する韓国第3の都市である大邱では頻繁に起こります。韓国の空軍戦闘部隊とアメリカの太平洋空軍の隷下にある第7空軍の駐屯するK2飛行場は、韓国空軍の核心基地の一つです。一日に何回も経験する戦闘機の騒音は、ここが予備戦場であることを想起させる信号ですが、市民たちはその事実を忘れたまま生活しています。韓国の主力戦闘機が離着陸する飛行場があり、近くの星州には

THAAD が配備されていますが、ここの人々は後方だということで安心しているようです。発表を準備しながら読んだテキストの戦場描写は、私にはいま・この戦闘機の騒音を連想させましたし、大邱から近い東海岸に立ち並んだ原発ベルトを喚起させました。そして、最近の韓半島をめぐる核 - 脅威の実際性について考えさせました。

この前の冬に学生たちと 1 週間広島に滞在したことから、原爆ははじめて私の思惟の対象になりました。恥ずかしいですが、原爆はそれまで私の関心事ではなかったのです。広島の戦争関連の場所と朝鮮学校を訪問したあと、広島・長崎に落された原爆が東アジアの歴史において非常に重要な結節点であると考えようになりました。この考えは、広島で聴いた被爆者証言の時よりも、韓国人被爆者の証言を通じてより本格的になりました。広島と長崎に投下された原爆は、韓国人被爆者の観点にたつ時に問題点がより浮彫りになり、国家単位では解決できない東アジアの恐怖と葛藤の歴史を解決できる可能性が模索できると考えます。今回の報告は、これらの問題についての結論ではなく、着手したばかりのところでの思惟の断想程度のものです。

2

日本軍慰安婦問題は、1991 年に^{キムヘクスン}金学順さんの勇気ある証言から始まり、関連団体の組織など、多くの人々の関心を引きながら、韓・日間の最も尖鋭な過去事問題になりました。国際的にも日本の蛮行と歴史認識をあらわす事例になり、日本軍慰安婦問題を象徴的に表現した少女像が、韓国だけではなくアメリカ、カナダ、オーストラリア、中国などに立てられています。ところが、日本軍慰安婦問題とほぼ同じ時期に総動員として行われた強制徴用とそれにつづく被爆者の問題については、韓国の市民団体や政府も積極的に取り組むことは無く、ほとんど個人や民間団体が日本政府や企業を相手として補償問題を進めています。1965 年 6 月に朴正熙政権が調印した韓日基本条約の付属規定「韓日請求権協定」に具体的に提示されていないにもかかわらず、日本政府はこの請求権に属する包括的な戦後補償は終わっているという主張を繰り返しています。日本軍慰安婦の規模は、20 万名にもものぼると推算されていますが、そのうち現在 257 名の被害者名簿が公開されている状況です。一方、太平洋戦争期に日本へ動員された朝鮮人労務者の規模は、日本政府の資料によると軍人・軍属（11 万人）を含めて 17 万 4 千人、韓国政府の推算によると約 20 万人になり、現在の貨幣価値で換算した未収金の規模は 4 兆ウォンであると言われています。ところで、韓国人被爆者問題は、強制動員による被害と未収金問題とはちがって、その被害が深刻であると同時に苦しみがあとの世代までもつづく現在の問題であるにもかかわらず、大衆にほとんど知らされていません。解放から 45 年がたってから表面化された戦争関連の被害者たちの苦痛と惨状は、私たちに「国家とは何か」という問題をあらためて考えさせます。これまで韓国人被爆者が経験した苦痛の実態に接近することを妨げた最も大きな存在は韓

国政府であって、それは朴正熙政権が締結した韓日協定から始まります。むしろ、その背後には権力と資本の欲望があり、これが現在もこの問題を封印しようとする最も重大な力です。朴正熙政権の功としてあげられる経済発展は、強制動員された慰安婦と戦争関連被害者を含む韓国の近現代史の数多いホモ・サケル (homo sacer) の深くて長い苦痛に基づいたものでした。

1945年8月15日は韓国人にとっては光復節ですが、日本人にとっては敗戦の日になります。広島と長崎に落とされた原爆の惨状が韓国人に一つの実態として経験できない理由は、韓国人が原爆を日本の敗戦の決定的な理由と考えるからです。「原爆の経験は惨いが、その惨状が無かったら私たちの苦痛が終わらなかつたらろう」と考えるからです。原爆は、韓国人の内面において隅に押しやっておいた情念のパンドラです。その中には苦痛への憐憫とともに、日本にたいする宿怨があります。日本を旅行する韓国人旅行者が600万人にのぼっているにもかかわらず、広島と長崎を訪問する人は非常に少なく、訪問順位の対象にもなっていません。

去年の冬、広島を訪問した何人かの学生は、自分の人生において最も重要な旅行であったと告白しました。広島で、私たちは原爆の惨状を見ました。六日間、広島戦争関連施設をまわりながら、学生たちはどんなことがあっても戦争はいけないという考えを自然に持つようになり、広島の大生たちとも毎晩気軽に話し合いました。そして、朝鮮学校では今も続いている朝鮮人差別の経験と遭遇しました。原爆の惨状と接しましたが、日本にたいする複雑な感情は完全には解消されませんでした。このような状態は、私たち皆のためによくないです。

韓国において、被爆者問題が初めて公にされたのは、2002年に「韓国原爆二世患友会」を組織し、関連法案の制定のために尽力した^{キムヒョンニョル}金亨律によってでした。2010年8月には韓国人被爆者の苦痛が放送されましたが、地方放送(大邱 MBC/晋州 KBS)の小さい企画に止まりました。韓国人被爆者の実態は1970年代の後半に「韓国教会女性連合会」と「韓国原爆被害者協会」が中心になって初めて整理され、政府による実態調査は1990年の盧泰愚大統領の訪日にあわせて二ヶ月間おこなわれましたが、とてもずさんなものでした。55年ものあいだ、原爆被害者の問題は、政府から完全に見放されたものでした。その間、被爆者たちを支援したのは日本の市民団体であって、彼らによって韓国人被爆者の治療や支援がおこなわれ、関連内容は具体的な資料として述べられました。この過程はいうまでもなく朝鮮人にたいする日本政府の差別を乗り越えることでしたし、それと同時に韓国人被爆者訴訟の代表的な存在である「孫振斗裁判」のモットーであった「被爆者はどこにいても被爆者である」という事実を確認することでもありました。広島と長崎の原爆被害者は約70万人、そのうち朝鮮人被爆者は約7万人、死亡者は4万人、生きて故国に戻ってきた人は約2万3千人であると推算されています。被害者全体の死亡率は33%であるのに対して、韓国人被爆者の死亡率が60%近くになるのは、朝鮮人たちが爆心地から近いところに集中

していたか、適切な救護が施されなかったことを示唆しています。

日本にいる韓国人被爆者数が 6,005 名というかたちで、比較的正確に把握されているのに対して、韓国に帰還した被爆者の実態は現在までちゃんと究明されることがありません。韓国人被爆者は三重の被害者です。彼らは強制的に連れていかれ、原爆に遭い、長いあいだ見放されました。韓国人被爆者は人類が初めて経験した原爆の真実を究明する核心地帯です。

広島平和公園は一つ重要なメッセージを伝えています。市民の平和な日常が原爆によって根こそぎ破壊されたこと、原爆がいかに残酷な武器であるかを生々しく顕示すること、これが広島平和公園のメッセージです。ところが、そこには抜けたものがあります。それは最も決定的なものです。それは、「なぜ広島と長崎に原爆が投下されたのか」という点です。これについての省察と反省なしに、広島は決して平和都市になれません。「戦争の都市」としての広島と長崎についての深い反省なしには、平和は語れません。反戦は、記憶を復元し振りかえることから始めなければなりません。

韓国人被爆者の問題はまさに先の問題の地点にあります。韓国人被爆者の問題は、「なぜ彼らがそこにいたのか、そこにいなければならなかったのか」という渡日の背景と理由から始まります。そして、ここが日本人被爆者の問題と分かれるところです。多くの韓国人は原爆の被害が自分たちとは無関係なものであると考えています。それは原爆の実態と歴史についての無知によるものではありませんが、本質的には原爆を日帝の蛮行にたいする戒め・処罰の観点から認識するからです。この点を直視しないと、広島と長崎から得られる平和の教訓はあまりありません。韓国人被爆者の実態が明らかにされなかったのは、被害者側からの積極的な問題提起が足りなかったからでもあります。韓国人被爆者はかれらの苦痛を自ら語れなかったサブアルタン (Subaltern) であり、ここが日本軍慰安婦被害者との差が生じる場所です。原爆被害者は病気のためまともに働くこともできなかつたし、差別への恐怖のために積極的に名乗り出ることができませんでした。差別と排除の中心に韓国人被爆者の過去と苦痛が横たわっています。ここで注意ぶかくみるべき点は、日本軍慰安婦の被害者たちは韓国の市民団体とともに二つの国にたいして真の過去事清算を要請したのに対して、原爆被害者の場合は日本の市民団体とともに日本政府を相手として支援と治療の問題を解決しようとしたという事実です。これは注目すべきことです。

3

韓国人被爆者の問題を素材とした韓国文学は非常に少ないです。私の寡聞によるのかもしれませんが、原爆被害者問題を扱った作品は、^{ハン ス サン}韓水山の『軍艦島』(2016年)と^{コ ヒョン ヨル}高炯烈の長編詩「リトルボーイ」(1995年)程度です。韓水山の『軍艦島』を原作とした映画「軍艦島」が制作され、徴用者問題についての大衆的な関心を牽引はしたものの、かなり厳しい

批判も受けました。高炯烈の長編詩は、評論界の注目がほとんどありませんでした。恥ずかしいですが、私もこの二作品を知りませんでした。韓国文学は韓国人被爆者問題についてほとんど関心を向けなかったのです。

1946年に江原道の麟蹄で生まれた韓水山は、春川高等学校を卒業し、1967年に『江原日報』の新春文芸賞に詩が当選したあと、本格的に文学を勉強するため慶喜^{キョンジ}大学の国文学科に入学します。1972年に小説「四月の終わり」が『東亜日報』の新春文芸に当選してからは、時間のなかに消滅されていた存在を感覚的な文体で形象化することに専念しました。かれが作家としての立場を固めたのは、旅芝居の役者たちの哀歎をえがいた『浮草』(1976年)です。この作品によって1977年に現代作家賞を受賞した韓水山は、いくつかの新聞に小説を連載しながら大衆作家の道を歩みます。そして、1981年の春、『中央日報』に連載していた「欲望の街」の一部内容が政府官僚と軍人を否定的に描いたという理由で、安企部(国家安全企画部)でひどい拷問をうけたことから、人生の重要な転換点をむかえます。何人かの文学者ととも連累された筆禍事件を経験してから1988年に日本に渡った韓水山は、1989年に東京のある本屋で『原爆と朝鮮人』に出会い、その後岡正治牧師と「長崎在日朝鮮人の人権を守る会」のメンバーたちとともに軍艦島取材することになります。そして、岡正治牧師の軍艦島の死亡者関連資料に基づいて「日はのぼり、日はしずみ」というタイトルの長編を1993年から『中央日報』に連載します。3年間の連載が惨憺たる失敗に終わったあと、前作のほとんどの内容を棄てながら同じ題材をあつかった長編小説『鳥』(全5巻)を完成し、さらに3分の1に縮約した日本語版『軍艦島』(2009年)と韓国語版『軍艦島』(2016年)を刊行しました。

小説は、軍艦島に連れてこられた人物たちの過去と軍艦島における生活を並置する方法で、強制徴用者たちの人生を形象化しました。島を脱出するための朝鮮人徴用者(応徴士)たちの謀議とかれらの運命の曲折、そして島のさまざまな人物間の関係を描いていますが、その末尾の部分で軍艦島を脱出した人々が長崎で生活しながら経験する原爆体験を描いたことで、強制徴用から被爆にいたる幅広い叙事になっています。この小説は、軍艦島にたいする詳細な取材と岡正治牧師から渡された軍艦島死亡者の死亡診断書や火葬認許証下附申請書といった資料に想像力を加えて構成したフィクションであり、作家が卒業した春川高校でおきた事件(常緑会事件)に関わった人物たちを背景とする叙事ラインも投影されています。

実際、この作品は、多くの人物が登場し、彼らの人生の曲折が描かれてはいるものの、人物間の関係の描写が散漫であるため、プロットの力が弱く、叙事が向かおうとする当時の真実をまともに描けていません。全体的には、歴史的な実態としての軍艦島が一つの素材として扱われているにすぎないように見えます。軍艦島をめぐる歴史的な真実ではなく、当時の典型的な人物群を軍艦島の事件に配置したかたちになっています。映画「軍艦島」に向けられた批判は、映画の問題であるより原作の問題であったのです。

この小説に登場している重要人物は、親日派の二世としての苦悩を示す尹知相^{ユンヂェガン}、「不穏な読書会」とされた常緑会の一員であった崔又碩^{チュエウソク}、崔を愛する慰安婦の錦禾^{クムファ}、尹知相の妻として忍耐の人生を生きる崔書螢^{チュエソフヒョン}、軍艦島からの脱出に失敗して酷い拷問を受ける時、日本人巡査に重症を負わせ収監される張泰福^{チャンテボク}、端島炭坑の労働運動と施設破壊の先頭にたつ申チョルと趙承道^{チュウソンド}、早く日本に定着して工事を請負い朝鮮人たちを雇うことで富を積んだ「六本指」、そして強制動員された朝鮮人たちに善意をほどこすヤスコ、イシカワ、江上老人と娘夫婦などです。

このような人物達をつうじて、作家はその時代を構成した人間群像を描いているわけですが、問題はこのような形象が軍艦島で象徴される強制動員の実態をさえぎっているということです。作家が描いているのは、強い欲望と善意です。前者は強制動員された朝鮮人たちの脱出への欲望や同族から利益を得ようとする親日派・朝鮮人業者の欲望であり、後者は惨憺たる現実のなかでも友情と義理を交換する人々の姿や朝鮮人にさまざまな善意をほどこす日本人の善良さです。作品はまるで泥から咲く蓮の花の美しさを読者に経験させようとするように思われます。映画「軍艦島」についての批判は、このような作家の意図に対する不快感に起因すると判断されます。最初の「朝鮮人はー」というセリフに含まれている日本人の視線を内面化した人物達の発言、朝鮮人に同情し彼らに善意をほどこす日本人たちの形象は、どこから来たのでしょうか。韓水山の『軍艦島』が日本で先に出版された現実をあらためて振り返らせるところです。

4

1995年に出版された高炯烈の長編詩『リトルボーイ』は、原爆の問題を民衆的・民族的・文明批判的な観点から総体的に描いています。語り手である少年金中輝^{キムチュンフイ}と、広島三菱造船所に派遣された朝鮮青年同盟員の李玉長^{イ・ヨクナム}の視線を交差させるなかで描かれている強制動員と原爆の惨状は、叙事と関連する具体的な事実をもとにして、原爆をめぐる事態の真実に肉薄しています。我々はこの作品をつうじて、原爆に関連する客観的な事実を知らされるだけでなく、それがどれほど恐ろしくて惨憺たることなのかを生々しく経験することができます。

彼等の苦痛が何故／我等の苦痛にならねばならぬのか。／戦争は終わり、彼等は追われるように／朝鮮に帰ってきたが、／彼等の苦痛はその時から始まった。／／その苦痛は日本の内部を通して／あの小さな爆弾、／リトルボーイからやってきた。／アメリカ合衆国からやってきた（高炯烈〔韓成禮訳〕『長詩 リトルボーイ』コールサック社、2006年、17頁。以下、『リトルボーイ』からの引用は、既刊の日本語訳による）。

「序章」にあたるこの部分は、朝鮮人の被爆被害の核心を非常に明確に問い詰めています。「彼等の苦痛が何故／我等の苦痛にならねばならぬのか」、この苦痛の絶叫こそ、朝鮮人被爆問題の核心的な言明です。その苦痛が「日本の内部を通して」、「アメリカ合衆国から」きたという点は、韓半島の現代史の桎梏をつらぬくものです。この問題について何の清算作業も無いまま、依然として韓国・日本・アメリカは東アジアの盟邦であります。

高炯烈の詩は、日帝期にあった朝鮮民族の惨状だけではなく、日本の地で日本の支配階級と米軍のため経験した（朝鮮）民衆の受難を克明に記すことを通して、戦争の実態について問い返しています。このような叙述方向は、社会主義・独立運動組織の朝鮮青年同盟員である李玉長をもう一人の語り手として設けている、この詩の戦略からも確認できます。さらに、民衆と民族の観点にたつこの詩は、原爆の文明史的な意味をも加えてあります。

私を作った父よ、／私を載せて太平洋に行かせた父よ、／目の悪い巨体の父よ、／めがねをかけても微かな光だけ／見える父よ、／広島に私を持っていかせた父よ、／これを、どうなさるおつもりか。／（中略）／どうして私を悪魔の子供に作ったのか（142-143頁）。

この詩は、「リトルボーイ」を魔王（pluto）の子と命名しながら、文明のなかの悪魔的なもの、すべての生命を破壊する文明の無知と闇を、激しい嘆息とともに繰り返して批判します。この原爆こそ近代文明の子であること、それは反生命的な文明にたいする強烈な拒否です。「リトルボーイ」のこのような自己否定の声は、原爆による人類の惨状とその悲劇性を生々しく描き出します。

小半日待つて捕まえた日本のひばり、／数万年も日本の山の麓で卵を産んで繁殖し／青い空を飛んでおとなになり／またつがいになって卵を産み、卵を抱いて、／自分のもう一つの命を孵化してきた美しい／広島の実の海辺のひばり／（中略）／坊や、その鳥を放してやりなさい、神様が育ててる鳥を、／誰もその鳥を捕まえてはいけないのよ。／（中略）／「あなた、あの子チョーセンジンの子みたいよ。／言うことを聞かないわ」と言う声が／走っていく私の背後から刺すように聞こえてきた。／（中略）／熱い日差しが目の中に入って来た。その瞬間／ふとひばりを殺してやりたくなった。／石を持ち、ひばりの頭を／下に敷いた石に当てて打ち下ろした。／頭の骨が砕ける音がした。／尾と細長い脚を少し震わせ／やがて翼が垂れて頭を垂れた（33-34頁）。

日本人から差別と恥辱を経験した語り手の少年の金中輝が、半日を待ち伏せて捕まえた「日本のヒバリ」を残酷に殺すこの部分は、差別と嫌悪がどのように伝染され、それが如何に恐ろしいものであるかを実感できるように形象化されています。日本の地で育てられ

たという理由だけで投射される少年の憎悪の感情と復讐の行為は、ロマンチックな人間主義と普遍的な人間愛では解消しきれない、ある種の宿怨を思い浮かばせます。平和は、どこから来るのか。この怒りと嫌悪の感情を治癒しないで、平和はたたして臨在することができるのでしょうか。

彼らはほとんど裸だった。／女は胸を見て分かったし／男は性器を見て分かったが／男や女は皆、日焼けした犬のように／真っ黒な裸をしていた。／（中略）／そこでは日本人、朝鮮人の／区분이なかった。／泣き叫ぶことだけが彼らを一つにした。／地獄の町だった。／生きて飛び跳ねながらあちこち／夫や子を切なく探す女も／廃墟になった道で口が裂けるほど／母を呼ぶ子供も／死んですでに黒く変色してしまった死者も／皆裸だった（171頁）。

原爆投下のあと、詩の語り手たちが広島で廃墟をあてどなく歩く場面は、地上の全てを消した原爆の残酷さを、ほかのどの描写よりも生々しく描いています。あてもなくどこかに向かって歩く人々の錯乱した姿から、私たちは地獄の風景を目撃するようになります。そのようななかで、語り手の視線に捉えられた残酷な死体の姿、すべての境界を消してしまった地獄の形象、男も女も「日焼けした犬のように／真っ黒」くなってしまった裸、「日本人、朝鮮人の／区분이な」いこの日の形象は、我々に苦痛と死が伝える格別な意味を喚起します。

エマニュエル・レヴィナスは、苦痛と死の顔こそ私の理念と自由を回収する倫理的な事件であると規定しました。我々は死の前で、その苦痛の顔の前で、無限の責任を負わされた奴隷達であるということです。それが苦痛と死が人間に伝える意味でしょう。

原爆被害者の問題は、長い時間の宿怨が横たわっている韓国と日本が、国家的な境界を消してお互いに接続できる、非常に重要な歴史的実案です。これはある特定の世代に止まることなく、代々受け継がれる終りのない苦痛である点で重大な問題であると同時に、戦争の根元を振り返らせるものでもあるという意味で、反戦と平和の拠点にもなりえます。憎悪の感情を越えて、韓国と日本が生産的に出会える道、そして一度もまともに問い詰められてこなかったアメリカの問題を、我々は原爆被害者の問題から導き出せるでしょう。

ディスカッサント発言3：日本から

村上 陽子

はじめまして、沖縄国際大学から参りました村上陽子です。原爆文学と、沖縄の戦後文学を中心に研究しています。

金先生のご発表のなかで、ここ嶺南大学校が「予備戦場」というお話がありましたが、私の勤務する沖縄国際大学も「予備戦場」となっている場所の一つです。日本の南端の島嶼県である沖縄は、アジア・太平洋戦争終結直後から1972年まで米軍占領下に置かれていました。そして、日本に施政権が返還された後も日米安保体制によって沖縄には広大な在日米軍基地が存在しつづけています。沖縄国際大学は普天間飛行場に隣接しており、2004年8月、沖縄国際大学構内に米軍のヘリコプターCH-53Dが墜落するという大事故がありました。幸い、死者は出ませんでした。その後も状況は改善されることなく、現在私たちはオスプレイという米軍の巨大な垂直離着陸機が飛び回る下で日々の講義を行っています。異様な状況が沖縄の日常となっています。また、現在日米両政府は沖縄県民やそれに連帯する多くの人々の抗議を無視して沖縄本島北部の辺野古・高江への新しい米軍基地の建設を強行しています。

金先生のご発表を伺って、韓国の被爆者をめぐる問題と沖縄の被爆者をめぐる問題には大きな共通点があると思いました。沖縄の被爆者の問題も、韓国の被爆者をめぐる問題と同じように沖縄の人々にほとんど知られていません。また、さきほど申し上げた通り、1972年まで米軍占領下に置かれていた沖縄において、在沖被爆者の存在は不可視化されていました。沖縄の被爆者の実態調査が開始されたのは1963年のことでした。調査が開始されたときにすでに亡くなっていた被爆者も少なくはありません。また、日本本土の被爆者には適用されていた原爆医療法は、沖縄の被爆者には適用されませんでした。医療費の自己負担と貧困にあえいでいた沖縄の被爆者の闘いは、まず原爆医療法の適用を訴えることから始まりました。その成果として1966年には沖縄在住被爆者に対する原爆医療法の準用が認められ、「原爆被爆者健康手帳」の交付も開始されることになりました。

沖縄在住被爆者が注目されはじめる時期は、沖縄の人々が在沖米軍基地への核兵器持ち込みや原潜寄港にともなう被爆／被曝の不安を感じはじめる時期とも近接しています。沖縄の米軍基地に核兵器が配備されはじめたのは1953年でした。冷戦体制のなか、沖縄の米軍基地に配備される核兵器はその数を増やし続け、キューバ危機を迎える頃には1300発

の核兵器が沖縄にあったと言われていました。沖縄の人々は、核と隣り合わせに生きていることを感じつつ、「予備戦場」にその身体をさらしていたのです。

沖縄の被爆者を扱った文学作品も非常に数が少ないです。それも、沖縄の被爆者をめぐる文学は当事者によって書かれはじめたわけではなく、沖縄の被爆者たちの記録に触発されるかたちで非当事者が事後的に生成していったものがほとんどです。沖縄の被爆者という存在が見失われていた時間はあまりに長く、その間に個々人の体験や言葉は取り戻しようのないかたちで失われていきました。それでもなお残されたわずかな記録が、沖縄の被爆者をめぐる文学的想像力を刺激し、沖縄の被爆者をめぐる言説を生成してきたのだと言えます。それは、沖縄や韓国において原爆の問題があらためて見直され、ここから先の新しい文学が生まれるかもしれないという可能性を私たちに示してくれます。

最後に、金先生にご質問をさせていただきたいと思います。^{ヘンヌサン}韓水山の「軍艦島」については、軍艦島から脱出した人々の原爆体験が末尾に挿入されているということですが、被爆の後、「朝鮮人徴用者」の人々はどのようなかたちで過ごしていくのでしょうか。日本の原爆文学において、被爆前後の朝鮮の人々への差別が描かれることはしばしばありますが、被爆を生き延びた朝鮮の人々、とくに日本を離れて故国に帰った人々の「戦後」をきちんと描いた作品を寡聞にして知りません。作者が書こうとしたのは戦時下の問題であったのかもしれませんが、もし「戦後」への視座がこの作品に見いだせるのであれば、ぜひそれを伺いたいと思います。

^{コヒョク}高炯烈の「リトルボーイ」については、1995年に発表されたということですが、なぜこの時期に韓国においてこのような詩が書かれたのか、歴史的な文脈があればお教えいただければと思います。

私のコメントは以上です。どうぞよろしくお願いたします。

ディスカッサント発言4：韓国から

権 赫 泰

はじめに

討論者は、文学研究者ではなく日本現代史の研究者なので、主に後者の立場から討論を進めたい。その過程において、ここ十年間に発表した討論者の原爆研究を参照することとする。まず、このワークショップの筋は、「原爆文学」を東アジアの観点から読みなおす」という表題にあらわれている。この表題を分解してみると、「原爆—文学」と「東アジア—観点」と「読む」という三つの要素で構成されている。これに、川口さんと金文柱さんが発表文で共通して言おうとする時空間、すなわち「北朝鮮による核危機」の時空間（これを広くとると朝鮮半島になり、狭くとると大邱や嶺南大学校になりうる）を加えると、問題はより複雑さを増してくる。「北朝鮮による核危機」という現時点の問題を思考の軸におくと、広島・長崎の経験にもかかわらず（あるいは、その悲劇のために？）、アメリカ（1945年）・ソ連（1949年）・イギリス（1952年）・フランス（1960年）に続き、「アジア」に属する中国（1964年）・インド（1974年）・イスラエル（1979年）・パキスタン（1998年）、そして北朝鮮がなぜ核武装に走ったのかといった問題を、また最近の問題に拡張すると、原子力の「平和的」利用という名のもとで、日本・韓国（脱原発?）・中国・台湾（今は脱原発?）、そしてインドが、なぜ原発の建設と拡大の道を選んだのかといった問題を導き出すことができる。

①東アジアという観点の問題

「先行的」核武装国（NPT5カ国）の後に登場する後発の核武装国が「アジア」地域に集中しているという事実について考える時、これをアジア固有の問題として捉えるべきなのか、もしくは近代以降の矛盾がアジアに集中的にあらわれた結果として捉えるべきなのかという問題がある。もちろん、このような問いは、軍事的な安全保障の問題だけではなく、なぜ開発主義がアジアで集中的に体现されたのかという問題をも含む。「東アジア」という観点が意味するものは何であるか、それは冷戦による矛盾の集中的な表現なのか、あるいはヨーロッパの冷戦を条件づける熱戦という観点なのか（西欧の冷戦はアジアの熱戦を重要な条件とする）。または、東アジアを特定の価値空間として想定し、いわゆる原爆を生んだ近代文明とその文明から派生した「アジア」そのものを問題化しているものなのか。要するに、「(東)アジア」は価値なのか、地政学的あるいは戦略的なカテゴリーなのか。「(東)アジア」という観点を介入させると、原爆問題にこれまでとは違うどのような新しさが加

えられるのか。もしかすると、韓国と日本の非対称的な原爆観を問題視するために東アジアという観点が必要なのか。

②東アジア+日本の問題

1964年の中国の核実験ニュースに接して、「日本人としては残念なことであるが」、「内心ではよくやった。アングロサクソンとその手先（日本人を含む）の鼻を折ってくれて一種の感動」を感じたという竹内好とは違う観点から、核武装のアジアでの拡散という観点からこの問題を考える必要がある。となると、やはり広島・長崎の経験が「〈戦後〉日本においてナショナル・アイデンティティを保証する集合的記憶として機能」（川口）していく過程と、その過程がヒロシマ・ナガサキを経て Hiroshima/Nagasaki といった形で「普遍化」（核武器 対 人間）していく過程が、結果的に「アジア」に共有できなかっただけではなく、その普遍化がアジア及び朝鮮人被爆者の排除を最も重要な構成要因としている問題について考えるべきである。要するに、日本の「戦後」の構造的な問題である。そして、そのような日本の「普遍化」過程が核兵器の特殊化、すなわち在来兵器との分離、さらには侵略と通常戦争との分離を通じて成り立ったことによって、広島・長崎の経験を「選民的な経験」（永井隆の言葉をかりると「神の摂理」）として位置づけさせ、責任の主體的な受容を非常に困難にしたということをも考慮すべきである。これと関連して、原子爆弾を投下したアメリカに向かうべき「民衆の恨み」を「神の摂理」という言葉でなぐさめるアメリカ側のデマゴギーに加担する言説であると批判した山田かんの指摘が思い浮かぶ。しかし、何よりも重要なのは、日本の「戦後」が広島・長崎の被爆経験があったにもかかわらず（あるいは、そのために）、日米軍事同盟と核の傘の枠組のなかで作動したということである。この問題意識は、いわゆる核の傘の保護の外におかれた非同盟国や冷戦体制の解体のあとに核の傘から外された地域から「自主国防」の名の下で「後発」核武装が集中的に行われたことを理解するうえで非常に重要な意味をもつ。だとすると、（東）アジアというカテゴリーは、同盟体制の形成と変容、これに対する主権国家の対応という回路をつうじて接近できるのではないだろうか。

③原爆+文学の問題

川口さんがいうように「原爆文学」という文学ジャンルは日本においては（原爆映画や原爆漫画にくらべると）相対的に確固たる地位を占める。ところで、金文柱さんの発表から分かるように、韓国においてはこのようなジャンル自体が存在しないと同時に原爆そのものをあつかった作品が非常に少ない。金文柱さんの批判的な紹介から分かるように、^{ハン・スアン}韓水山（特に『鳥』）を論外とすると、いわゆる韓国の原爆文学に含まれるのは^{キム・ウニル}高炯烈ぐらい（？）ということになる。このほかに、討論者の記憶している作品は、^{キム・ウニル}金源一の「あそこに至る長い道」（『作家世界』1992年夏号。1995年に同じ題名で単行本出版。後に、『広島の花火』〔文学と

知性社，2000年]というタイトルで改作のうえ再刊)程度である。範囲を映画まで広げても、「ジャズバー広島」(カン・グテク監督，ヨム・ジョンアとカン・ソクウ主演，1992年)にとどまる。したがって，韓国の原爆文学というジャンルは，初めから存在しない。すると，金文柱さんの問題意識から，多くの被害者が存在するにもかかわらず，なぜ韓国では原爆が一つの文学ジャンルとして成立することはさて置き題材としても扱われなかったのかという問題を導きだすことができる。すなわち，数少ない原爆作品を分析するとともに，なぜ韓国では原爆が重要な文学ジャンルを形成することができなかつたのかという問題(原爆文学の不在)を，なぜ日本では原爆文学が一つのジャンルとして定着したのかという問題と関連づけ，原爆文学というジャンルの形成史における比較研究の観点から考えてみる必要がある。おそらく韓国では広島・長崎の原爆を解放・光復の契機として受け入れる観点が強く作用したという歴史的経緯があるからであろう。討論者は，このような観点を過去のアメリカの「戦争早期終結論」を借りて「植民地早期解放論」と命名したい(拙稿「集団の記憶，個人の記憶」『現代思想』2003年8月，青土社，参照)。

おわりに

韓国の原爆文学の不在についても一つ考えるべき問題は，「植民地早期解放論」のような観点があるにもかかわらず，日本の原爆文学(漫画を含む)が韓国にかなり紹介されているという事実である。たとえば，永井隆の『長崎の鐘』(1949年，2011年)，井伏鱒二の『黒い雨』(1989年，1999年)，大江健三郎の『ヒロシマノート』(1999年，2012年)，中沢啓治の『はだしのゲン』(2000年)，宮崎駿の『風の谷のナウシカ』(2004年)，こうの史代の『夕風の街 桜の国』(2005年)などが，韓国で紹介された代表的な作品である(この他にはジョン・ハーシーの『ヒロシマ』[1986年，2015年]など)。しかし，このような翻訳出版が，韓国人被爆者への関心につながっていった痕跡はない。すなわち，被爆経験の「外部化」，あるいは分離の問題である(金文柱さんの発表で紹介されている高炯烈からは，この問題に変化が生じているように見える)。したがって，日本の原爆関連の作品の翻訳と受容およびその背景を分析し，受容過程における一種のバイアス問題も韓国の原爆観形成の問題として同時に検討する必要がある。たとえば，中沢啓治が初期作品で示したアメリカにたいする憎悪(人種的憎悪)が，なぜ『はだしのゲン』では消えたのか(拙稿「平和，人間，そして日本：「はだしのゲン」と「風の谷のナウシカ」」『当代批評』，2001年春。「広島・長崎の記憶と唯一被爆国の言説」『日本批評』第1号，ソウル大学日本研究所，2009年，参照)。金文柱さんの言葉をかりると，「憎悪の感情と復讐の行為」がなぜ「浪漫的な人間主義と普遍的な人間愛で解消」されているのかという問いである。また，こうの史代の『夕風の街 桜の国』の翻訳においても，原作のもっている本質的な問題のほかにも，原題にある「桜の国」という表題がなぜ韓国語への翻訳過程において抜けたのか，「韓国の読者へ」という著者の文章の中に，「広島には連れてこられた韓国人が多く住んでいた」という文章が加えられたり「広島の原子爆弾は戦争を

早く終わらせるための決定」という文章が本の紹介文に挿入されたりしているのもバイアスの代表的な事例である（拙稿「〈排除の政治性〉と広島被爆の〈再記憶〉：こうの史代の『夕風の街 桜の国』を中心に」『作家世界』21-3, 2009年8月）。

国際ワークショップを終えて

宇野田尚哉・川口隆行・崔範洵

1 開催に至るまで

本国際ワークショップを開催するに至った経緯について略述しておく、そもそもの発端は、宇野田が2015年10月に韓国日本語学会に招かれて「「戦後」の臨界と「文化運動」研究の現在」と題する講演を行ったことだった。この講演で広島『われらの詩』を含む50年代サークル文化運動の研究動向について話したところ、当時から学生を引率して広島を訪問する活動をしていた崔範洵が関心を持ってくれ、宇野田も在朝日本文学者小林勝を主題とする崔範洵の研究に関心を持った。

その後、2016年9月に崔範洵の招きで宇野田が嶺南大を訪れ、その際陝川で建設中の原爆資料館のことが話題にのぼり、大邱で国際ワークショップを開催して陝川を訪問するという案が生まれた。宇野田の招きで崔範洵が大阪大を訪れ、グローバル日本研究クラスター主催の国際ワークショップで「小林勝の小説における〈戦後〉の形象化―植民地体験・反戦運動体験とその記憶―」と題する報告を行ったのは同年12月のことで、このときには川口隆行がディスカッサントをつとめ、翌日には崔範洵も神戸で開催された原爆文学研究会に参加し、研究会終了後の相談で、大邱で国際ワークショップを開催して陝川を訪問するというプランが再浮上した。

その後それぞれの事情でプランを具体化できずにいたが、6月に崔範洵から宇野田・川口に呼びかけがあったのに呼応して急速に準備が進み、無事に開催にこぎつけることができた。今回の大邱での国際ワークショップと陝川へのスタディ・ツアーを可能にしたのは、嶺南大学校人文学事業団東アジア平和学チームの尽力と、原爆文学研究会からの積極的参加にほかならない。

国際シンポジウムの類は、大学の周年行事としてやらざるをえないからとか、たまたま研究資金を獲得できたからとか、そんな理由で開催されることが多い。そんな理由で開催された国際イベントにおいては、研究者は、呼び集められ、そして帰っていくだけで、実質的な研究交流がなされることは少ない。ここに開催に至るまでの経緯をやや詳しく記したのは、本国際ワークショップの場合は実質的な研究交流から積み上げられたことで開催されたことを強調するためである。

短い期間ではありながらも実質的に積み重ねられてきた研究交流の成果を、いったんこ

のようなかたちでまとめたうえで、次にどうするのが問われてくることになるだろう。それぞれの持ち場に持ち帰って熟成させるのか、あえて対話の場を設け続けるのか。熟慮することとしたい。 (宇野田尚哉)

2 成果と課題

原爆投下といえば日本の植民地支配からの解放という意識が根強い韓国社会において、「原爆文学」というジャンルの存在など認識の埒外とはいわないにせよ、あまり関心＝利害が向けられる対象ではないのかもしれない。そうした現状において、文学（日本文学、韓国文学）、歴史、思想史等の多彩な専門を背景とする研究者が、「原爆文学」をめぐる議論を交わす場を韓国で設定しえたことこそ、今回の国際ワークショップの最大の成果と言ってもよい。

もう少し具体的に言うならば、「原爆文学」というジャンル（制度）の歴史的成立過程で抱えこんださまざまな問題を越境や交渉という作業を通して再考する貴重な機会となったように思う。ワークショップの議論はきわめて文学的であると同時に、73年前におきた原爆投下という出来事に韓国はもとより日本人々が社会的にどう関わってきたのか、という大きな問題をあらためて考えさせるものでもあった

また、2000年代以降盛んになった冷戦研究を背景に、東アジアという枠組を設定し、台湾や沖縄の個別事例を話題にできたのも議論に広がりを持たせることにつながった。ワークショップの趣旨説明において崔は、東アジアと「原爆文学」というテーマ設定について、「東アジア内部の非均質性や断絶を省察する契機」とする可能性に触れたが、報告者やコメンテーターの発言はもとより、フロアを含めた全体討議を活発にすすめる過程においてこうした可能性の一端が垣間見られたように思う。

ただし、コメンテーターやフロアからの質疑でもあったように、東アジアという枠組の内実について、ワークショップ参加者はもとより報告者やコメンテーターにも認識の開きがあったのは事実である。簡単に言ってしまうと、分かったような、分からないような曖昧で便利な言葉として、「東アジア」を使ってしまった側面がないわけではない。少なくとも企画者の私たちをふくめて報告者、コメンテーターのあいだでは、一定の共通理解の構築、問題の所在の把握が事前に必要だったと反省している。また、日本と韓国、さらに台湾、沖縄と、冷戦体制成立以後の国民国家や地域をそれぞれ代表するかのような報告者やコメンテーターの役回りについても、もう少し工夫が必要であったかもしれない。さらにいえば、「東アジア」とタイトルに掲げながら、核兵器保有国でもあり原発大国でもある中国と絡む文脈をまったく構成できなかつたという点は、北朝鮮と絡む文脈を十分に構成できなかつたという点以上に、深刻な欠落であるだろう。「東アジアから原爆文学を読みなおす」という問題設定の可能性が、ここでは厳しく問われているといえよう。

今回の国際ワークショップは、「原爆文学」という言葉をあえて掲げることで、こうした文学ジャンルが存在する日本／不在の韓国（あるいは台湾）といった構図を一度は可視化させ、そこに対話や議論のきっかけを見出そうとした。だが、「原爆文学」というジャンルは不在でもそれぞれの国や地域に、原爆や核、さらには原発をめぐる言説や表象はさまざまに存在している。冷戦研究を背景とした東アジアというテーマを考えた場合、こうした観点からも今後議論を深める必要があるのではなかろうか。（川口隆行）

3 陝川訪問の意義

2017年9月30日の陝川訪問は、前日に開かれた国際ワークショップに続く重要な日程であった。厳密に言えば、「〈原爆文学〉を東アジアの観点から読みなおす」という国際ワークショップの主題と日程は、8月6日に韓国の陝川に原爆資料館が開館するということ念頭においたものであった。今回の国際ワークショップは、陝川の原爆資料館の開館と原爆文学研究会の方々の深い関心があったから開催できたのである。

ところで、陝川の原爆資料館に対しては、韓国社会より日本社会のほうがはるかに大きな関心を寄せている。今回のワークショップを準備した筆者が資料館開館のニュースをはじめ聞いていたのも広島においてであったし、具体的な準備状況と開館日程を知らせてくれたのも反核・脱原発運動にたずさわっている大邱の日本人であった。9月30日の訪問に先だって8月17日にも資料館を訪問したが、それも10名の広島の平和教育研究所の方々が訪ねて来られたからである。その時NHKはすでにドキュメンタリー制作のための長期撮影を進めていた。このような経験をもとに、筆者は8月26日に韓国原爆被害者協会の陝川支部長である沈鎮泰シムジンテさんと韓国原爆被害者協会の事務局長である韓正順ハンジョンスンさんをお招きして、大邱の市民に韓国人被爆者の状況を知らせるための催しを開いたが、参加者は思ったより少なかった。また、今回の国際ワークショップを大邱地域の新聞社や放送局に知らせたものの、取材に訪れたメディアはなかった。このような個人的な経験は、韓国社会の原爆被害者への関心不足や原爆文学の不在とも相通じていると思われる。

ワークショップの報告で金文柱キムベョングさんも述べたように、韓国人原爆被害者の存在が広く知られるようになったのは、故金享律キムヒョング（1970-2005）さんが2002年3月22日に大邱で記者会見を開いたあとのことである（金享律さんは、この記者会見で自身が被爆二世であることをおおよげにしたのち、「韓国原爆二世患友会」を結成し、二世の立場から「韓国原子爆弾被害者と原子爆弾二世患友の真相究明及び人権と名誉回復のための特別法」の制定に取り組むなか、2005年に亡くなった）。1970年代と1990年に韓国政府の実態調査があったが、それは中身の無いものに止まった。長いあいだ韓国社会は、韓国人被爆者の存在すらも知らないままであったのである。金享律さんの記者会見のあと、2003年には市場淳子さんの『韓国の広島』（『ヒロシマを持ち帰った人々』の韓国語版。書誌については宇野田報告参照）が出版され、また2008年には34

歳で亡くなった金享律さんの評伝が出版されるなかで（전진성『원폭 2 세 환우 김형률 평전 : 삶은 계속되어야 한다』, 휴머니스트, 2008年），韓国社会でも原爆被害者への関心が少しずつ広がった。しかし，社会全体でいうと，まだ少数の関心である。1945年当時の朝鮮人被爆者が約七万人と推算され，その被爆の苦痛がいまも二世・三世まで続いていることを考えると，より多くの関心と行動，そして制度的支援が切実な状況である。国際ワークショップにつづく陝川訪問は，日韓の研究者同士がこのような状況への関心と行動をともにしていくきっかけを作ったところに最も大きな意義がある。

陝川の資料館を訪問して感じたのは，展示のあり方の面でも，関係資料の収集・整理の面でも，今後継続的な取り組みが必要であろうということである。資料館が開館に至ったのは大きな一歩であるが，展示のあり方については不断の再吟味が必要であろう。（今回は時間的な制約が大きく日本からの参加者とこの点について十分な意見交換をすることができなかったのは残念であった）。また，関係資料の収集・整理も，沈支部長個人の尽力に依存している部分が大きいようであり，その研究も含めて，一刻も早い対応が必要であろう。さらに，陝川訪問のバスに同乗して，韓国人被爆者二世・三世の状況を説明してくれた韓事務局長の言葉は，韓国社会が，そして地域の大学が果たさねばならない役割を考えさせてくれた。今後は，関心だけにとどめず，教育と研究につなげていきたいと考えている。（崔範洵）